

---

# 流星のロックマン4 ラストエンジェル

earth

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン4 ラストエンジェル

### 【Zコード】

Z2236Y

### 【作者名】

earth

### 【あらすじ】

世界を3度救った英雄その名もロックマン。

メテオGを破壊してから、2年後の話。

中学1年生になった、スバル達は、楽しい学校生活を送っていた。しかし、その幸せもつかの間、今度の敵は、他国の軍事？

太陽系外の惑星？

裏切り者は、一体誰だ。

スバル達を待つ運命は、希望か絶望か。

現在、  
蠢く陰謀

編

◦

## プロローグ（前書き）

earthです。初めての投稿です（^-^）／  
頑張りたいと思います。

## プロローグ

「」は、太陽系外のとある惑星。

コンコンと、2回ノックをして、黒い服の男が中に入つた。

「失礼します。」

「何だ、ピエール。」

奥に居る男が、話し掛けた。

黒い服の男の名前は、ピエールという、背が高く、眼鏡をしていて、鼻が高く、目つきが鋭い。

「アダム様、例の物なのですが…」

奥に居る男の名前はアダムといつ。髪の色が銀色で、肌が白い。

「例の物がどうした。」

「はい、完成いたしました。」

ピエールが真剣な顔で言つ。

「本当か」

「はい、今はレベル6をも倒しております」

「そりが、もうレベル6か。」

「今は、インフェルノモード使えるかどうか、実験中です。」

「わかった、もういいぞ。」  
とアダムはピエールに告げた。

「はい、わかりました。」

そう言い、ピエールは、部屋をでていった。

「フツフツフツ～ようやく完成したようだな  
これで地球は、私の物だ。私の邪魔など  
誰にもさせない。」

アダムはそういう、謎の部屋に入つていった。

## プロローグ（後書き）

結構難しいですね。 ( ; )  
感想よろしくお願いします。 \(^o^)/

転校生は、アイドル？（前書き）

〃フリガに出でまよーーー（^>○^<）／＼

## 転校生は、アイドル？

メテオGの事件から2年後、スバル達は、コダマ中学校の生徒になつていた。

「また、同じクラスね。」

この人は、みんな知つての通り、白金ルナ  
僕等は、未だに委員長と呼んでいる。

「知らない顔もいますけど、ほとんど小学校  
のまんますね。」

この人は、最小院キザマ口物知りだけど、  
背が低いことを気にしているらしい。

「腹、減つたな。」

「ゴンタ君、いつも食べることしか考えない  
のは、やめてください。」

いつも、食べる事しか考えない、この人は、  
牛島ゴンタ、見るからにして、ガキ大将に  
しかみれない。しかし、ウイザードの  
オックスと電波変換して、  
「オックス・ファイア」になるんだ。  
頼もしいっちゃ頼もしい。

「でもさ、みんな一緒に良かつたじゃん。」

「それもそうね。」

……と4人でやり取りしていたら、先生が入ってきた。

「席につけ、朝の会を始めるぞ」

『ハーサイ』

「とその前に今日は、転校生がきているぞ」

『本当?』　　『男かな女かな』  
などという声が辺りから聞こえた。

「入ってきなさい」

と先生が転校生を呼んだ

入ってきた、瞬間、クラスが全員か、固まった。

「今日から、みんなと授業を受ける、  
響だ、みんな、仲良くするよ!」

「今日から、このクラスで授業を受ける事になりました。響ミソツです。よろしくお願  
いします。」

## 転校生は、アイドル？（後書き）

つぎはクラス戦争がおきます（  
次回もよろしくお願ひします。（  
）；）

## 学校で（前書き）

3年間でわたらせ。(^ ^)。

## 学校で

響ミソラの自己紹介（みんな知ってるけど）が終つたが、クラス全員は固まつていた。

「じゃあ、響の席は……」

先生の言葉に、固まつていたはずの男子生徒（スバル以外）の目いつせいに鋭く光つた。

『はいはいはーい、ミソラちゃんは、僕（俺）の隣で～』

その光景を見たスバルは、苦笑いしか出来なかつた。

『あの女、スゲー人気だな。』

ハンターバグの中から声が聞こえた。

『そうだね、ロック。やっぱり国民的アイドルは、違うね。』

『スバル。でもよ、俺達は世界を3度救つた英雄だぜ。』

『それは、関係ないでしょ。』

『いっちは、ウォーロック。AM星生まれのFM星育ち。通称ロック。ロックと出会つたのは

3年前のFM星襲撃の時だつた。ロックは、アンドロメダの力ギを  
FM星から盗み、地球上に  
逃げ込んだ。僕は、ロックと出合つて良かつたと思つ。もし出合つ  
てなかつたら、  
父さんも救えなかつたし、地球も終わつていただろう。

学校で（後書き）

感想よりこへー（<○>）ー

学校で2（前書き）

4話田出来たぞ

## 学校で2

『なあ、スバル。』

「何、ロック。」

『あの女がきたって事は…もしたして。』

ハンターにもう1体増えた。

『ポロローン、それは一体誰のことかしら』

『げえっ！ハープ。』

『スバル君、お久しぶりね。』

こいつは、こと座のハープ。3年前のFM星人襲撃の時に地球に來た。歌うことに悩んでいた、ミソラにとりつき、人を傷つけはじめたがロックマンに止められ、今は、ミソラのウイザードとなっている。

電波変換すると、「ハープ・ノート」になる。

『おい！ハープ、早くあの女の所に帰れ。』

『つむさいわね、ウォーロック。』

そう言った、ハープの拳がウォーロックの顔面にヒットした。

『グッハツ。何するんだハープ。』

ハープは、容赦なく殴り付けた。さすがのウォーロックも気絶していた。

2体のやり取りを見ていた。

『俺の隣に』　『いや、僕の隣に』　といつ声が周りの男子生徒の声が聞こえた。

すると、ミソラが

「先生。私、スバル君の隣を希望します。」

「ん。そうか。おーい星河、隣いいか。」

「えっ…あっ、はい。大丈夫です。」

ギラリ！

男子生徒全員とドス黒いオーラをまとった委員長達の殺意のこもった、鋭い目がスバルに向けられた。

(大丈夫かな、僕の中学校生活)

スバルの、思いも知らず、ミソラは明るかつた。

「よろしくね。スバル君

「じゃあ、授業をはじめるぞ。」

（放課後）

授業が終わり、みんなは帰る支度をしていた  
スバルは、ミソラに話かけられた。

「スバル君、後で屋上に来て。」

「いいけど、どうしたのいきなり。」

「内緒 だよ」

## 学校で 2 (後書き)

テスト勉強はじめなきや  
エリアの騎士おもしろい

学校で～（前書き）

5話目あたへ  
でせじつわ

## 学校で③

スバルは、ミソラに屋上に呼ばれたため、今は、学校のエレベーターの前にいる。

「ロック。なんで、ミソラちゃんは、僕を屋上なんかに呼び出すんだろうね？」

『知らねえ。俺に聞くな。』

「そうだよね。』

チンと音がなり、エレベーターのドアが開いた。

（コダマ中学校 屋上）  
エレベーターに乗ったスバル（ロック）は、屋上に来ていた。

「あれ、誰もいないじゃん。』

すると後ろから、田嶋をされた。

「だーれだ」

「うわあ（うううのうて間違えた方がいいんだよね。）『ンタかな？』

「当たり。』

「嘘だろ。」

スバルは考えもしない、答えがかえってきたので、びっくりして目隠しをしていた人の手をどけた。すると、田の前には、ミソラがいた。

「やつぱり、ミソラちゃんか。」

「やつぱりってなによ、やつぱりって。」

「いや、別に。てか呼び出したりして、ビハしたの。」

そしたら、ミソラの頬が、赤くなつた。

「あのね、ス、スバル君、わつ私がなんで転校してきたか知つてる？」

「ミソラちゃん、頬赤くなつてるよ。  
熱でもあるの？」

「ううん、大丈夫。」

「そり、それならいいけど。ミソラちゃんが転校してきた理由でしょ。分からなによ。」

「そうだよね。私ね、スバル君に会いたかつたんだ。」

「僕も会いたかったよ。」

「スバル君の会いたかったは、友達としてで  
しょ。」

「どういふこと?」

ミンラは何か決心した表情をしていた。

「私ね。スバル君のことが好きなの。」

「ふうーん…………えつ、それって。」

ミンラは、「クツと頷いた。

「スバル君は、私のこと好き?」

いま、スバルは、すゞいテンパつてゐる。  
「私のこと好き?」といつミンラの言葉が  
頭の中をぐるぐる回つてゐる。

## 学校で③（後書き）

テスト勉強はじめなきゃ

僕で良ければ。（前書き）

連續でじゅしました。  
ミンカラちゃんって可愛いんですよね。  
スバルが、羨ましい。

僕で良ければ。

スバルは、とてもパニックに陥っていた。  
なぜなら、目の前には、国民的アイドルがいてその人は、自分が  
できた初めてのブラザーであり、命に変えてまでも守った人だった  
から。

「ミソラちゃん、本当に僕でいいの？」

「うん。スバル君じゃなきゃダメなの。」

「僕で良ければ、お願ひします。」

「スバル君……グスッ、ウエーン」

ミソラは、泣きくずれてしまった。

「ミソラちゃん、大丈夫？なんか悪いことし  
た？」

「クズッ、ううん、嬉し泣き。」

「そうか。良かった。」

「スバル君……」

ミソラは、そういうて、スバルに抱きついた。

「ミソラちゃん、やめてよ。」

スバルの顔が、急激に熱くなつた。

「もう、少しだけ。」

どれくらい時間がたつだろう、も夕日が沈みそうでいた。

「ミツリちゃん、そろそろ帰るっか。」

「そうだね。」

僕で良ければ。（後書き）

そろそろ、敵キャラ圧あらぬやさかな。

## 嘘だ～！（前書き）

テスト勉強しなきゃいけないのですが  
投稿します。

嘘だ〜！

スバルとミソラは、中学校を出て、住宅地を並んで歩いていた。

「ミソラちゃんの家つてベイサイドシティだよね。」

「やうだよ。それがどうしたの。」

「いや、あのや、家がベイサイドシティー  
なんだから、電波変換で帰ればいいのに。」

「スバル君は、私と帰るのイヤ？」

ミソラは、今にでも泣きだしそうだ。  
スバルは、ミソラのこの顔に一撃で、やられた。

「いや、ちつ、違うよ。『ダメか』  
ミソラちゃんの家つて遠いいじ  
やん。」

(スバル君、この顔に弱いな これから、この顔で甘えよう )

ミソラの泣きそうな顔は、すべて演技だった。スバルは、このこと  
に気がつかない。

「うん。 そのことは、大丈夫だよ。」

「ふーん。わかつたよ。」

「これからさ。スバル君の家に行つていー？」

「いいと思うよ。」

それから、数分後、スバルの家が見えてきた。

「うわあ、スバル君の家久しぶりだな。」

「そうだね。さあ、入るつか。」

（スバルの家）

「母さん、ただいま。」

「お邪魔します。」

「スバル、ミソラちゃん、『』飯できるわよ。」

この人は、僕の母さん、星河茜。

今は、僕と父さんと母さんの3人で住んでいる。

「僕は、まだしも何故ミソラちゃん？」

そう言つと母さんは、不吉に笑つた。

「スバル、聞いて驚きなさい。今日から、ミソラちゃんがこの家で住む事になったの。」

「はい、よろしくお願ひします。」

僕の脳が一時的にストップした。

「嘘だよ。」

**嘘だ～！（後書き）**

どうでしたか？感想待っています。

II(前書き)の歌の形

連続で上

スバルは、今、頭がおかしくなっている。

「ミソラちゃんが、僕の家に。ハハハッ夢だよね。」

「スバル君のお母さん、スバル君が、スバル君が、おかしくなりました。」

「大丈夫よ。いつものことだから。」

スバルは、母のことばを聞いて田を覚ました。

「母さん、誰がおかしいって？」

「あなたの事よ、スバル。」

この2人のやり取りを見ていたミソラが笑った。

「何がおかしいの、ミソラちゃん。」

「いやー。スバル君の家って賑やかだなと思つて。」

「ミソラちゃん。いいは、今は、あなたの家なの、だから私のことをお母さんて呼ぶこと

それと、帰つて来たら、お邪魔します。じゃなくて、ただいまよ。私もミソラって呼んでもいい？」

ミソラは、もつ泣きそつた、茜は、やれこミソラを抱き寄せ

た。

『いいな、家族つて。』

「あれ、ロックいつの間にいたの？」

『ずっと居たぜ。』

「静か過ぎてわからなかつたよ。」

## // 今後の課題（後書き）

ねむいですが、頑張って書きました。

（太陽系外の惑星）

「アダム様、どうしますか。すぐにでもガンマ部隊でも、地球に送りますか？」

アダムは、少しの間だけ考えた。

「いや、ヒートを呼べ。」

「わかりました。」

ピールは、そう告げると部屋を出て行った。数分後、ピールは、赤い髪の男と一緒に入ってきた。

「アダム様、ヒートを連れて来ました。」

「つむ、ヒートよ、今から地球にいって来い。」

「アダム様、それって、地球消していいの？」

アダムは、飽きた顔で言った。

「ヒート、お前は、いくつ惑星を消せばいいんだ。残念だが、まだ、消すな地球人には、例の物を使う。お前は、オーパーツを探せ。」

「オーパーツを、探すのは、いいけど、喧嘩は、売つていいんだな。

「

「構わん。好きにせい。」

「わかりました、じゃあ、いつてきます。」

「本当に、良かったのですか、アダム様。」

「いいんだ。結局奴も捨て駒だ。」

「ですが、ヒートを止められる奴つてありますか。」

「地球上には、青き流星と呼ばれている、地球を3回救った奴がいる  
と、噂だ。」

「青き流星ですか、興味深いですね。」

（スバルの家）

今は、茜とミソラが、二人で夕食の準備をしていた。ミソラは、一  
人で今まで生活をしていたから、料理が得意である。

「なんか、本当の親子見たいだね。」

スバルは、この光景を見た本心であろう。  
楽しく、しゃべりながら料理している、一人は、本当の親子見たい  
だった。

## 地球へ（後書き）

どうでしたか。感想待っています

## 家で

スバルは、ミソラと茜が夕食の準備をしているので、スバルは、自分の部屋にいた。

「ミソラちゃんと母さん、本当に親子見たいだつたね。」

『ああ、そうだな。だがスバル、お前とミソラも夫婦みたいな物だろ。』

スバルは、とても顔を熱くした。

『なつ、何言つてるんだよ。そんな訳ないじゃないか。』

『言い逃れはよくないぜ、スバル。俺は、見ちゃつたんだ。』

「誰と？」

『ハーブとだ、残念だつたな。おフクロに言わなきやな。付き合つていること。』

スバルは、辞めると言おうとしたが、イヤな時にイヤな人が、はいつてくる。

「スバル、その話しほど？」

そこにいたのは、茜だった。

「母さん、聞いてたの？」

「バッカリね。」

茜は、腕を出し親指を立てた。

「で、付き合っているの、スバル。」

「えーっと、付き合って、「付き合っていますよ。」

そこに入ってきたのは、ミソラだった。

「ミソラちゃん、何言つてんの。」

「えー、いいじゅん、付き合つてるんだから。」

「スバルは、幸せもんね。こんなに可愛い子が彼女だなんて。」

(ロックの状況なんとかして。)

《俺に聞くなよ。》

ミソラは、何故か顔が真っ赤だった。

たぶん、茜に可愛いと言わされたからだろう。

その時スバルのハンターヴGが鳴った。

(ナイスタイミング)

スバルは、そう思い、ニアディスプレイをだした。そこには、見えぼえのある、顔が出てきた。

「久しぶりだな、スバル。」

「シドウさん、退院したんですね。」

ディスプレイに映っている、男は、暁シドウと言つ。サテラポリスのエースとして、活躍していたが、ジヨーカーと戦い、死んだと思われていたが、ウィザードのアシッドのお陰で、助かつた。今は、ジャック、クインティア、と共に、サテラボリスについて、最近、退院したらしい。

「スバル、明日は、暇か？」

「明日は、土曜日なので、大丈夫です。」

「そうか、じゃあ渡したい物がある、明日、サテラポリスに来てくれ。」

「はい、わかりました。」

家で（後書き）

漢検あきらめます

スバルと茜、ミフナは、夕食を食べていた。

「ミフナが、スバルとね。」

「母ちゃんもういいじよ。」

「ミフナ、空き部屋作つたけど、スバルある、  
スバルの部屋にする。」

「スバル君の部屋で。」

「即答。ミフナちゃん、ダメだよ。僕男だよ。」

「大丈夫だよ。スバル君、君は、そんなことは、しないキャラだか  
ら。」

「いや、キャラって。」

そんなやり取りをしていたら、大悟が帰ってきた。

「父さん、お帰り。」

「大悟さん、お帰りなさい。」

「お邪魔します。」

「あー、ミフナさん。いらっしゃい。」

「大悟さん、ご飯にする?」

「飯にするよ。」

この一人は、星河大悟。僕の父さん。

今は、大悟、茜、スバル、ミソラでご飯を食べている。

「へえー、スバルとミソラが。」

スバルとミソラは、顔を真っ赤にして、ご飯を食べている。何故なら茜が付き合っていることをチクつたのである。

「スバル、良かつたな。」

「もう、辞めて、ご馳走でした。」

スバルは、さつそつと自分の部屋に帰つて行つた。

『スバル、顔真っ赤だぜ。』

「うるさい、ロック。」

（リビング）

今は、大悟、茜、ミソラで食べてこる。

「ミソラ。」

「はい?」

「スバルをよろしくない。」

ミソラは、頷きスバルの部屋に向かつた。

「良かったな。スバル。」

「そうね。青春ていいわね。今日は、大悟さんに甘えようかな。」

「辞めるよ、茜。」

## 部屋での出来事

スバルと西、ミフナは、夕食を食べていた。

「ミフナが、スバルとね。」

「ぬれぬれにしてよ。」

「ミフナ、窓を部屋作つたけど、スバルが、  
スバルの部屋にする。」

「スバル君の部屋で。」

「即答。ミフナちゃん、ダメだよ。僕男だよ。」

「大丈夫だよ。スバル君、君は、そんなことは、しないキャラだから。」

「いや、キャラって。」

そんなやり取りをしていたら、大悟が帰ってきた。

「父さん、お帰り。」

「大悟さん、お帰りなさい。」

「お邪魔します。」

「あー、ミフナさん。いらっしゃい。」

「大悟さん、ご飯にする?」

「飯にするよ。」

この一人は、星河大悟。僕の父さん。

今は、大悟、茜、スバル、ミソラでご飯を食べている。

「へえー、スバルとミソラが。」

スバルとミソラは、顔を真っ赤にして、ご飯を食べている。何故なら茜が付き合っていることをチクつたのである。

「スバル、良かつたな。」

「もう、辞めて、ご馳走でした。」

スバルは、さつそつと自分の部屋に帰つて行つた。

『スバル、顔真っ赤だぜ。』

「うるさい、ロック。」

（リビング）

今は、大悟、茜、ミソラで食べてこる。

「ミソラ。」

「はい?」

「スバルをよろしくない。」

ミソラは、頷きスバルの部屋に向かった。

「良かったな。スバル。」

「そうね。青春ていいわね。今日は、大悟さんに甘えようかな。」

「辞めるよ、茜。」

（スバルの部屋）

スバルは、一人で宇宙の本を読んでいる。

「スバル君、スバル君。聞こえないのかな。」

ミソラは、スバルの、耳元で息を吹きかけた。

「うわあ、何ミソラちゃん。」

ミソラは、黙つていた。

「用が無いなら、本読むよ。」

何故か、ミソラの顔が真っ赤だった。

スバルは、本を読もうと本に目をとつとつと、思った時ミソラに抱きつかれた。

ミソラちゃん、やめてよ。と叫みついた時だった。腰にミソラの唇が当たった。

「んぐう。」

数秒たつた。

「スバル君、嫌だつたかな。」

ミソラは、なにか言われるんじやないかと思つていた。

「いいよ。別に。」

スバルの、言葉にミソラは、びっくりした。  
ミソラは、嬉しさのあまりスバルにまた、抱きついた。その時だつた。

「いい物、見せてもらつたわよ。」

「母さん、何みてんの。」

スバルとミソラの顔は、真つ赤だ。

「いいじゃないの、別に、。」

「良くない。」

「まあ、いいわ。お風呂はいったわよ。  
順番に入つてね、それとも……」

「はい、ストップ。」

「ミソラちゃん、先はいっていいよ。」

「うん、わかった。」

スバルとミソラは、順番にお風呂に入つて、今は、スバルの部屋にいる。

「ミソラちゃん、僕のベッド使っていいよ。」

「スバル君は？」

「僕は、もう一つだすよ。」

「ヤダ。」

「何で。」

ミソラは、顔をほんのり赤くした。

「一緒に寝よ。」

「だつダメだよ。僕、男だよ。」

「大丈夫だよ、スバルそんな事しないから。」

「そのセリフどつかで聞いた。」

黙の出来事（後書き）

がりでしたか。

次の日の朝。

「うーん、おはよう、ロック。」

スバルは、まだ眠いのか、目をこすりながら言った。

『スバル、久々に起きるの早いじゃねえか。』

「うん。今日は、サテラポリスに行くんだよね。何渡してくれるのかな。もしかして、新しく出た望遠鏡とか。」

『知らねえよ。でも、望遠鏡ではないな。』

「そうだよね。」

隣では、ミソラが気持ち良さそうに寝ていた。

『スバル。ミソラも連れて行くのか。』

「いや、連れてかなくて良いんじゃない。」

『分かった。じゃあ行く準備をしようぜ。』

「行かせないよ。」

後ろから、声が聞こえた。

「ミソラちゃん、起きてたの。」

ミソラは、頷いた。

「いつから。」

「結構前から。」

「じゃあ今日、僕サテラポリスに行くから。」

「えー、私も行く。」

スバルは、少し考えた。

「分かつたよ。じゃあ準備しよう。」

スバルとミソラは、朝食を食べにリビングに行つた。リビングの中にはいると、大悟と茜が笑つてこっちをみた。

「おはよー、って何で笑つんの。」

「いやー、朝からいい物見せてもらいました、新婚さん。」

スバルとミソラは、顔を真つ赤にした。

何故なら、茜が寝て居るスバル達を内緒で見て、大悟に言ったのだ。

「スバル、お前、一緒に寝るのは、ダメだろ。」

「いや、それは…ミソラが。」

ミソラは、驚いたようにスバルを見た。ミソラは、自分のせいになつたことじやあなく、スバルに呼び捨てされたことにおどろいていた。

「まあ、いいや。母さん」飯。」

「もひへ、出来てるわよ。」

そつ西に言われ二人は、テーブルに座つた。

「スバル、今日び行くんだ、デートか。」

「ちつ、違つよ、今日は、サテラポリスに行くんだ。」

「スバル、顔真つ赤だぞ。」

そう言われ、スバルは、顔を触つた。

「本當だ。」

「ミソラちゃんまで、辞めてよ。」馳走様でした。」

「私も、」馳走様でした。」

「じゃあ、行つてくるよ。」

「いつてきます。」

「氣をつけて、いつてくるのよ。」

「はーい。」

二人は、元気にして行つた。

（日本コスモウェーブ）

「おい、そこのお前、オーパーツって知つてるか。」

ヒートの電波変換した姿は、赤い体、バイダーは、こげ茶色、アームに鋭く尖つた爪。驚っぽい。

「お前、見ない顔だな。オーパーツって何だ。」

「オーパーツを知らないのか。まあいい、じゃあ死ね。」

ヒートは、電波君に突撃し、鋭い爪で引っ搔いた。

「うわああああ。」

電波君は、テリートされてしまった。

「ふう～どにあんのか、オーパーツ。」

『そんな物、ないんじゃないかな。』

「つむせー、レダ。」

（サテラポリス）

「いやあー、着いたね、久しぶりだね、スバル君。」

「そうだね。」

サテラポリスは、1階～64階まである。  
WAXAと合併している。

スバルとミソラは、サテラポリスの中に入つて行つた。その奥には、  
暁がいた。

「あつ、暁さん、久しぶりです。」

「そうだな、サクサクサクサク。」

「暁さんって本当にうまい棒好きだよね。」

「といひで、何をくれるんですか～。」

「ミツリちゃん、いきなり過ぎでしょ。」

「ああ、それは、これだ。」

シドウは、奥の机にあつた、ハンターバージに似た物をスバル達に見  
せた。

「これって、ただのハンターVGですよね。」

「いや、違つんだ。これは、ヨイリー博士の作った、ハンターナビ  
だ。」

## ノイズとニコートリノ

「ハンターネBって何ですか。」

スバルは、首を傾げた。

「ハンターネBの頭文字のNは、ノイズ、ニコートリノを意味する。」

「じゃあ、Bは。」

「Bは、まあバージョンってところだな。」

「でも、ノイズは、メテオGを破壊してからなくなつたんじゃないですか。」

「ああ、でもほんの少しでも、高性能ハンターネBは、感知できる。」

「

「へへ。」

「でも、ニコートリノってなんですか。」

ミソラは、曉に質問した。

「ああ、それはだな…」「曉さん、いじは、僕が。」

ミソラは、後悔した、スバルのオタクダマシイに火を付けてしまったことに。

「――アーティストのつてこののは、中性微子の仲間でね、――アーティストの…」

(やばいよ、スバル君のオタクダマシイに火を付けちゃったよ、何  
か話をそらせる話題はないのかな。)

「暁さん、他に機能は、ないんですか。」

「あつ、ちゅう」と

スバルは、いきなり話をそらされたので、いじけた。

「いこむ」

「他の機能は、うーん、あつそうだ、

前、電波変換をする時は、トランスコードだつただろ。」

「それがどうしたんですか。」

「ああ、それが、ユーヴンコードになつたんだ。」

ରମେଶ୍ ପାତ୍ର

「ジーンコードは、簡単に言うと合体だな。スバルは、二〇〇三、ミソヒチ、二〇〇四だ。」

「じゃあ、二〇・〇〇2は、誰なんですか。」

いじけた、スバルが食いついた。

「NO.002は、今、任務をしている。」

「そうですか。どんな、人ですか。」

「そうだな、電波変換すると、ゼロ・セイバーになる。」

「ゼロ・セイバー？」

「ああ、紅蓮剣、ゴーク・ド・バヤン・ソードを使う。そして、俺と同じで、電波PGで変換する。」

「電波PGってなんですか。」

「電波プログラムまあ、アシッドと同じで  
ことだ。」

『お久しぶりです。』

シドウのハンターNBから一枚の白いウイザードがウイザードオンした。

「アシッド、久しぶり。」

『アシッド、お前生きてたのか。』

『私は、電波PGですから。あの爆発でバラバラになつた私のデータをサテラポリスの方々が探し出してくれたのです。それをヨイリー博士にメインコン

ピュータから、修復作業をしてもらい、今に至ります。』

「良かったね、アシッド。」

## 久しぶり

スバルとミソラは、シドウの「つまい棒」についての話を3時間フルで聞かされていた。アシッドが止めてくれなきやいつ帰れたか。今は、帰ろうとしていた。

「ミソラちゃん。もう帰ろうよ。お腹減っちゃったよ。」

それわそーだ、今は、午後2時。家を出たのが午前9時。サテラボリスに着いたのが午前10。ハンターネットについての話が1時間。そして…シドウの「つまい棒」の話が3時間。よく話が続く物だと感心してしまった。

「そうだね。私もお腹減ったな~。」

「嘘…！」

何故驚くかといふと、ミソラは、サテラボリスにいた時に「つまい棒」をたらふくたいあげられていた。それにも、シドウはびっくりしていた。そして…ほとんど食べられていたので、いじけていた。

「まあいいや。じゃあ帰ろうか。」

「待つて。」

「どうしたの？」

「いや、せっかくだから…夕日でも見ながら。」

「別にいいけど…」

「じゃあ決まりね。いくわよ！ハープ。」

『ええ。//ハープ。』

「ハイゼンパーク004 ハープ・ノート」

ミソラは、ハンターニンバをかざし天に突き上げた瞬間、ピンクの光に包まれ、ハープ・ノートへと変身した。

「おっ先に～。」

「あー、ちゅうど…つたぐもつ。」

「ハイゼンパーク003 シューティングスター・ロックマン

スバルもハンターニンバをかざし青い光に包まれ世界を3度救った英雄ロックマンに変身した。

『久しぶりの変身だな。』

「やうだね。じゃあ行こうか。」

→サテラポリス上空ウーブルード→

「どうだよ。オーパーツしてやつせよ。」

驚座のレダと電波変換をした、ヒートはサテラポリスのカーブロードにいた。

『フフン。ヒートやつぱりないんじゃないか。』

『いや、アダム様の言ひ事は確かだ。』

『まあいいか。探すのは、お前なんだし。』

## 激突

（サテラポリス上空ウェーブロード）  
スバルとミソラは、電波変換をしている。

「うわあ、久しぶりだな。」

『そうだな。体も少し軽くなつたんじやないか？』

「.....」

「スバル君、コッチに来て。」

「今行くよ。」

『無視かよ。酷くねえか。』

「うわあ、綺麗だね。」

スバルとミソラが見ているのは、今にも沈みそうな夕日であった。  
（ヒートとレダ視点）

「クソ、何処なんだよ。オーパー。」

ヒートとレダは、サテラポリスのウェーブロードにいる。  
そして、このウェーブロードには、ロックマン、ハープ・ノートが  
いる。

『そりいえば』

「うん、なんだ、レダ何かあるのか。」

『オーパーツなんてアダム様は、ないと言つてたぞ。』

「嘘つくななら、お前、半殺しにするぞーーー。」

ヒートは、レダをウイザードオンにして、  
レダの首を絞め頭を揺らした。

『嘘、嘘、嘘。やめろ死ぬ。』

ヒートは、やすがに手をはなした。

『死ぬかと思った。』

「おじレダ、あそこにあるのは、ま、」

ヒートの指を刺した先には、ロックマンと  
ハープ・ノートがいた。

『あいつら、感じた事がある周波数だ。  
思い出した、ウォーロックとハープだ。』

「ウォーロック、ハープ? ?」

『ああ、俺もFM星人だからな。あいつらが  
地球上に侵略した時、俺は、他の星にいたからな。面白い。行くぞ。  
ヒート。』

「ああ、分かつた。」

レダと電波変換したヒートは、一瞬にして、  
その場から消えた。

『ロックマンとハープ・ノート視点』  
ロックマンとハープ・ノートは、夕日を見ていた。

「綺麗だね。」

「うん。そうだね。」

穂のぼぼしていた時、田の前に黒い影がみえた。

「なんだあれ。」

『スバル！ 気をつけろよ。やばいぞ…あいつは。』

「ロック、どうしたの？」

『あいつは、やばい、感じたことのある周波数だ。くつ、くわるわ。』

目の前にいた、黒い影が目の前に来た。

『久しぶりだな。ウォーロック。』

『お前は、レダか。』

「レダって。」

『鷲座のレダ。コーグアスやヴァルゴと同じ大悪党だ。』

『ふん、まあそうだ。フーン、ロックマンって言つんだ。』

「なんで、知つているんだ。」

「まあ、いい。立ち話ももう面倒だ。」

本題にはいる。お前は、オーパーツを使つたことがあるのか？』

「オーパーツ？使つたことは、ある。」

「やはうそうか。」

『おい！レダ、何故俺たちの名前やオーパーツを使つたことがあるなんて知つているんだ。』

『ウオーロック、知りたいか。倒せたら教えてやるよ。行くぞヒート。』

「待て、まだ俺たち名前名乗つてないじやん。」

『いいだろ、そんなの。』

「良くねえ。俺たちの名前は、レダ・ホークだ。覚えておけ。まずは、小手調べだ。

ホークスラッシュユー！』

レダ・ホークは、腕を振り抜き鋭く尖った光を飛ばした。

「くっ、よけきれない。バトルカード、バリア。』

ロックマンとハープ・ノートの周りにシール  
ドができた。しかし、薄いバリアは、意図も簡単に破られた。

「くっ、うわああああ。」

## ロックマン vs ハープ・ノート vs レダ・ホーク

ロックマンとハープ・ノートの周りに砂煙がまつっていた。

「砂煙が邪魔でレダ・ホークが見えない。」

バトルカード エアスチール。』

ロックマンの右手が扇風機のよつた形になり、その扇風機から強力な風がでた。

「良し、砂煙が消えた。どこだ、レダ・ホーク」

『スバル、上だ。』

ウォーロックの声に反応した、ロックマンは、上を向いた。

「ウイングショット。』

また、レダ・ホークから、鋭く尖った光が飛んできた。

「くつ、やばいな。』

その時だった。

「ショットノート！』

ハープ・ノートからいろいろな色の音符が鋭く尖った光に向かつて飛んで行つた。

音符と光が空中でぶつかり大爆発を起こした。

「ちっ、やるじゃねえか。ウイングオブホーク！！」

レダ・ホークはロックマンに向かつて突進した。形的には、ラリアットを食らった。

「うわああああ。」

「続けてホークスラッシュ。」

レダ・ホークは、ロックマンに鋭い爪で2回引っ搔いた。

「くつ、本当にせい。」

「休んでるヒマはないぞ。ウイングショット。」

「くつ、ロックバスター。」

ロックマンは、左腕を構え、無数の球を放つた。しかし、すべては、撃ち落とせられなかつた。そして、3つの光がロックマンに当たつた。

「うはあ　はあ　はは　はは。」

ロックマンは、肩で息をしてくる。

「ぐはつ。強い。本当に強い。」

血を吐いた。

ロックマンは、もうボロボロだった。

ヘルメットは、ボロボロでバイダーは、かけていた。

「これで、終わりだ。もう少し楽しませてほしかったよ。さらばだ。」

ロックマンは、奥歯をおもにこりきり噛み田をつぶつた。

「……ホークアックス。」

レダ・ホークは、斧を取り出した。

「さらばだ、ロックマン！――！」

レダ・ホークは、おもいっきり斧を振り抜いた。

だが、

「…………えつ。」

ロックマンは、攻撃を受けていなかつた。  
何故かつて、それは、ハープ・ノートが  
盾になつたからだ。

「ハツ、ハープ・ノート？」

ハープ・ノートは、モロにレダ・ホークの  
攻撃を受けていた。

レダ・ホークのアックスから、血がポタポタと垂れていた。

「みつ、ミソラアアアアアアアア。」

ハープ・ノートは、その場に倒れた。

「ロックマン、よつ、よかつた、無事だつたんだね。」

ロックマンは、ハープ・ノートに駆け寄った。

「ハープ・ノートなんでかばつたの?」

「大切な人だからかな。はあつ、ロックマンいや、スバル君……生きて。」

ハープ・ノートは、そのまま、目をつぶってしまった。死んだかどうかは、分からぬ。

「ふざけんな、ふざけんな。」

怒りの矛先をレダ・ホークに向けた。

「つおおおおおおおおおおおおおおおおお。」

大地と大気が揺れ始めた。

『ノイズ率9.999%……限界突破……ユートリノ開放……スペースゲート……アクセス開始……アクセス完了……プラネットサーバー……アクセス……プラネットPGMダウンロード開始……ダウンロード完了。』

「つまおおおおお。 プラネットPGM発動。」

ロックマンが赤い柱に包まれた。

ロックマンの姿がプラネットPGMの力で変身した。

「ハアツ、 プラネット・スター・ロックマンーーー！」

体全体は、 黒 バイダーは、 赤 形は、 \の字  
翼があり、 右手には、 剣を持っている。

その名は、 レーザーテインカオスフレイム。

「終わらせよう。 ハープ・ノートの為にも。 行くぞーーー！ レダ・ホ  
ーク！ーーー！」

## ロックマンα and ハープ・ノート vs レダ・ホーク（後書き）

あれ、エアスチールなんてカードあつたっけ????????? 無かつたら、オリジナルってことで。

ロックマン変身しました。

どうでしたか？僕的には、あまりバトルシーン自信ない。感想よろしくお願いします。

## 怒り

「ふん、面白い。楽しませてくれそうだな。」

「行くぞ！－レダ・ホーク。カオススラッシュ。」

ロックマンは、剣を振り抜き衝撃波を起した。

「ふん、ホークスラッシュ。」

衝撃波と鋭く尖った光がぶつかった。  
ウェーブロードでぶつかり合った。

ドーンという音と同時に風がおき、ロックマンとレダ・ホークは、  
後方に吹き飛ばされた。

「面白い。面白すぎる。久しぶりだこんな戦い。」

レダ・ホークは、一二アッと笑った。

「何が面白いんだ。お前は、僕の大切な人を傷つけた。絶対に許さない。」

ロックマンは、鋭くレダ・ホークを睨んだ。  
そして、一瞬にして、消えた。

「消えた。」

『ヒート、後ろだ。』

「何。」

ロックマンは、レダ・ホークの後ろに来ていた。そして、剣で切りつけた。

「ぐはっ……速いぞ。」

「ロック、行けるよ。勝てる。」

『おう。ハーブとミソラの仇をうつ。』

「そう簡単には、負けないよ。ウイングオブホーク…………」

レダ・ホークは、猛スピードで突撃してきた。

「首ぐらい吹っ飛ばせるぞ。」

レダ・ホークは、スピードをまったく緩めずロックマンに向かって走った。

ロックマンも負け時と正面で受け立った。

剣を前に突き出した。

「ふん、そんな剣へし折つてやる。」

残り10m……………残り5m……………

レダ・ホークにロックマンの剣がぶつかった。レダ・ホークは、30m以上吹っ飛んだ。

「うはあ……………俺が押し負けるなんて。」

レダ・ホークは、体じゅうに傷が痛々しいほどついている。

「もひ、終わらせよ。PFB（プラネット フォース ビックバン） プラネットオブディザスター。」

ロックマンが手を上げ黒い球体を作り、その黒い球体をレダ・ホークに向け投げつける。

レダ・ホークは、黒い球体に吸い込まれた。

「くつ、なんだよ、この黒い球体。」

ロックマンは、手を合わせパワーを溜める。溜まつたと思うと手を突き出した。

「レダ・ホーク、お前は僕の大切な人を傷つけたんだ。この攻撃は、ハープ・ノートの攻撃だと思え。」

ロックマンの突き出した腕から、黄色い光線が放たれた。

レダ・ホークは、PFBを食らったのだが、まだボロボロになりながらも立っていた。

「ぐうううう、まだ……終わって……ない。」

「まだ、立てるのか。」

『ヒート、もう辞めるんだ。今のお前じゃ勝てない。』

「くつ、分かつた。ロック……マン……今度は……絶対に……勝つ。

「

レダ・ホークは、そういうて消えて行った。

『スバル、このPGM、すごい力だ。』

「そうだね。でも、少しやり過ぎたかな。」

ウェーブロードは、道が半分なくなっている  
もう、ボロボロだ。

「ハープ・ノートは？」

ロックマンは、辺りを見回した。

「いたつ。」

30mぐらい先にハープ・ノートが倒れていた。ロックマンは、ハ  
ープ・ノートに駆け寄り

おんぶをした。

「サテラポリスの病院に連れて行こう。」

（太陽系外惑星）

分厚いドアが開いた。

開いたのは、レダ・ホーク。

「救護班、ヒールプレイスをつかわせろ。」

ヒールプレイスとは、ピエールが作った、回復が一気に早くなる機械だ。人間を入れるくらいのでかさのカプセルだ。

「「はつ。」「

一人の隊員がレダ・ホークに聞いた。

「何故、ヒート様がここまでやられたのですか。」

レダ・ホークは、「青い流星」と呟いた。

「えつ？？」

レダ・ホークは、何も言わずヒールプレイスの中に入つて行つた。

「サテラポリス病院」

スバルはミソラをおんぶして、病院に運んだ。ここは、ミソラの病室。流石は、国民的アイドル部屋が豪華つてそれどころじゃないか。ミソラちゃんの傷は、そこまで深くなつたらしい。命に別条はないそうだ。ホツとしたのもあるけど、自分の無力を感じた。

## 悔しき

自分の無力さを感じると、何故か泣きたくなつてきた。ミンラは、隣で寝ている。

スバルは、頭を抱えた。

「僕は……彼女も守れなかつた。僕は……本当に……弱い。」

『スバル……』

ウォーロックも悔しそうだ。プラネット・スター・ロックマンにナリレダ・ホークを追い詰めたが結局逃げられてしまった。一番強いPFBでも仕留められなかつた

「あまり、自分のせいにするなよ。」

ミソラの病室に入ってきたのは、暁　シドウだった。両手には、流星のうまい棒を抱えている。

「暁さん。でも……」

シドウは、優しく笑つた。

「そんな顔するな。ミソラが目を覚ました時にお前がそんなにしようとくれてちゃ駄目だろ。むしろ、僕があいつを倒したんだって自信持つて言え。」

「でも、僕は、倒せなかつた。悔しいんだ。ミンラちゃんをボロボロにしたあいつを

倒せなかつた。おまけにPFBでも……

「スバル、でもな倒せりやなんでもいいじゃないだろ？。もつと自信持てよ、お前は世界を3回救つた正真正銘のヒーローだ。まあ、俺もこいついう時あつたからな。」

「えつ？？本当ですか。」

「まあな。この話は、今度してやる。」

「じゃあ、本題に入らうか。スバルに渡されたプラネットPGMは、ヨイリー博士がいろいろ見てくれている。

あと、サテラポリスの警備ウイザードが二ホンのコスマモウェーブを警備中爪みたいな物で引っかかれていた、電波くんがいた。

警備ウイザードが電波くんをサテラポリスに持つていき、ヨイリー博士に渡したらしく、ヨイリー博士も疑問に思つたらしく、解剖してくれた。そしたら、レダ・ホークとやらの残骸電波が引爆いたあとにあつたらしい。で、もつと調べると悲しい事が分かつた、電波変換させていた人間の方が言いにくいんだが……何処かの国のこと……。」

シドウが大事な所を言おうとした時病室のドアが開いた。入ってきたのは、クインティア。手には、花束を持っている。

「シドウ、スバル君にはその話は、重すぎる。」

「ああ……そうだな。スバルこの話は、忘れてくれ。」

「えつ、でも気になります。」

「気にしない方がいい。気にしないでくれ。」

シドウは、とても悲しそうな顔をした。  
話ができなかつたこととスバルば思つたが、  
他の理由かもしれないと思つた。ずっととづつと悲しい、入つてはい  
けない領域に立つてゐる気がした。

「…………分かりました。」

「じゃあ俺は、このへんで、じゃあなスバル。ミソラヒヨウじく。」

「はい…………。」

「じゃあ、私も一人の邪魔は、いけないわね。スバル君、さよなら。」

シドウとクインティアは、逃げるよひに病室を出て行つた。

「本当に良かったのか、ティア。」

「ええ、今は、まだ駄目よ。何処かの国が  
アメロッパのWAXAから、大量のミサイルの  
設計図のコピーを、子供達の拉致、その子供達を……」

「こんなかいの敵は、二つかな。」

シドウは、そう呟いた。

「アメロッパ ホライティック ハウス」  
「ロバート大統領、ロバート大統領。」

黒いスーツの男がノックをし入った。

「どうした、デービス。」

デービスと呼ばれる男は、赤いネクタイをしていて、鼻が高く、髪が金髪。目が鋭い。

「今、WAXAから、連絡がありました。」

核ミサイルの設計図のコピーや、子供達が何人か拉致されたとのことです。」

「それは、本当か！？！？ ちつ、もしかしたらZ国かもな。」

「Z国、高い軍事技術のある国ですか。」

「ああ、噂では子供達を集めてその子供達に電波PGを使わせ強制的に電波変換させるという噂を聞いた。最近は、経済状況も悪いようだしな。」

ロバートは、深く考えた。3分は、頭を抱えて考えていた。

「よし、二ホン、アジーナ、シャーロ、アフリックのWAXAに伝える。アメロッパのWAXAに電波変換の出来る戦力になる人を集め

めうとひな。

」

「はい……。分かりました。

」

ヒヒヒ

（2時間後）

スバルは、ずっとミソラの手を握っていた。  
スバルも流石にレダ・ホークとの激闘もあり  
疲れていたのか寝てしまった。

「うんっ……。」

ミソラが起きた。体は、包帯をぐるぐるにされていた。体だを少し  
起こした。

「あっ、痛いっ。」

そこにハープが心配そうに出てきた。

『大丈夫。ミソラ？』

「うん。大丈夫。スバル君は。」

『寝ているわよ。レダ・ホークも旦那が倒したわよ。』

ミソラは、顔を赤くした。

「旦那って。」

『な～に、違うの。あ～違うのか、じゃあスバル君に言わなきゃね  
』。

「それは、ダメー。」

『ハハハッ、嘘よミソラ可愛いわね。』

ミソラは、頬を膨らませた。

「もーう。」

「うへへ。やべえ寝ちゃった。」

スバルが、少しうるさかったのか、起きた。  
スバルは、ミソラのベッドに伏せて寝ていた。体を起こすと同時に  
衝撃が起きた。

「うはつ。だつ誰。重い。」

犯人は、ミソラだった。エヘヘと舌を出しながら笑った。

「ミソラちゃん、起きたの。」

「うん。起きたよ。」

『じゃあ、ウォーロック私達は、行きますか。』

『そうだな。未来の旦那頑張れ。』

ハープとウォーロックは、何処かに行ってしまった。ミソラの病室  
には、スバルとミソラしかいない。

「『めん、僕が守らなきゃいけないのに、僕の方が逆に助けてもら

つて。」

「聞こえたよ、スバル君の声。」

「えつ、なんの事。」

「ミツク～～って叫んでたよ。」

「あれは、必死で……」

「嬉しかったな。自分もピンチなのに私の事を気にかけてくれて。よし、これから、お互い呼び捨てね。」

「なんでこきなり。呼び捨てって、無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理。」

「なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで……。」

「はつ、恥ずかしいから。」

(可愛いなスバル君。)

「本当にダメ??」

ミツクは、スバルに涙目 + 上目遣いで攻撃した。

(それはなしでしょ、ミツクちゃん。)

「ああ、分かった。分かりました。」

「本当? いいの?」

ミンカラは、一気に顔を明るくさせた。

「いいよ。でも、学校以外でね。」

「やつた~。大好きスバル。」

ミソラは、嬉しさのあまりスバルの胸に抱きついた、安心したのか  
ミソラは、寝てしまった。

「ミカ、ミソラ寝ないでよ。」

スバルは、そつとミソラをベッドに寝かせた。その時だった、病室  
のドアがまた開いた。  
入ってきたのは、茜、大吾だった。

「父さん、母さん……ごめんミソラを守れなかつた。」

茜は、そつとスバルを抱いた。

「母さ」「怪我は、無かつたのスバル。」

茜は、今にも泣きそうだ。それは、そつだらう子供が電波変換をし  
世界を3度救つても英雄ではない母親にしては子供に過ぎない。  
子供を大切にしない親は、いといえれば嘘になるが茜にとっては  
英雄でもなんでもない可愛い息子なのだから。

「うん。でもミソラが……僕をかばって……」

「それはちがうよ、スバル。」

「えつ、ミソラ。起きてたの。」

ミソラは、起きていた。ゆっくりと体を持ち上げた。

「私の演技力舐めないでね。私は、スバルを大切だから、いなくなつて欲しくないから……」

スバルは、勢いよく立ち上がった。

「ふざけるな……僕だってミソラには、いなくなつて欲しくない。僕だってミソラが大切なんだ。だから、危ないことば、辞めてくれよ。頼むよ……。……怖かった、ミソラがいなくなるんじやないかと思うと本当に怖かった。」

「スバル……」

スバルは、あまり怒らないだが私の事を大事に思ってくれていることは感じた。

## N国 の 力

「N国 プリズム・ドーム」

メインルームなのか、沢山の人々が忙しく働いている。奥には巨大なコンピュータがある。巨大なコンピュータの隣にはいくつもの小型のテレビがあり街並の映像、防犯カメラのような物だろう。中央には作戦を建てるデスクがある。その机に何人かの人々が地図を釘づけに見てている。

「作戦は、成功したようだな。」

「ああ。でもやるな世界最高峰のアメロッパのWAXAからミサイルの「ペーと子供を拉致し、戦力が一気に増えたな。」

軍事帽を被った、濃い緑の服を着ていて軍証が沢山ついている。

「ああ、そうだな。これでアメロッパへの戦争に近づけるな。」

「やつとこれで、7年前の復讐ができるな。」

「どうだ、電波兵器 「ホーリー・レン」の  
製造の調子は??」

奥のコンピュータを操作している、男に話かけた。

「そうですね、ざつと1・000ぐらいですかね。」

「拉致をした子供達が400。」の国の子供達が800人か、.....」

「でも、世界最高峰のWAXAアメロッパ支部は、そんなに簡単に落ちないぞ。ホーリー・レンは、どこの強さなのか。」

奥のコンピュータを操作して いる手が止んだ。

「そうですね。バトルウィザード 5体いつぺんにきても楽勝です  
ね。」

机に座つてゐる一番偉いであらう男が、地図を指差し怒鳴つた。

「狙いは、アメロッパ。我々は、アメロッパを殲滅し復讐を果たす。奴らは、ミサイルの「ヒー」や子供達の拉致、多分我々の国がやつた事を分かっているだろう。アメロッパを我々の基地におびき寄せ、畳み掛ける。

絶対勝つのだ。勝てる戦力は、我々には、ある。アメリカには電波体を作れる人は、いないだろう。もし、他国との連合国が作られても我々には、勝利の2文字しかない。」

そう言い張ると部屋に戻つて行つた。

サテラポリス病院

{ } { } { } { } { }

スバルのハンターN.Bが鳴った。今現在は、医療機器がハイテクになり、病院でも他人の迷惑にならない限り病室でも、電話が出来るようになつた。

スバルは「ソシ」と書いてあるホーリーを押した。そしたらシドウの顔が出てきた。

「暁さん。どうしたんですか。」

「スバル、お前は、今ミソラの病室か。」

「そうですけど。」

「分かった。病室を出る。あまり聞かれたくないからな。」

「聞かれたらどうなりますか？」

スバルは、唾を「クツ」と呑んだ。、

「俺が、長官に怒られる。」

「そうですか…………。」

スバルは、茜、大吾、ミソラに「ちょっと出掛ける。」と言い残した。  
病院を出て病院の裏に来た。

「ここなら、大丈夫か。」

「大丈夫か？？」

「はい。それで何ですか。」

「ああ。まずは、プラネットPGMについてだ。プラネットPGMは、何だかの原因でノイズから、ニユートリノに変わった。プラネットPGMは、多分ニユートリノ・チエンジだろう。プラネット・スター・ロックマンは、ニユートリノ率200%でなれる事も分かつた。」

「マージノイズみたいなものは、ありましたか。」

「あつたが、サーバーからの強力な、セキュリティのせいでこいつの操作を受け付けない。だが、プラネットモードとは、あつたな。」

「

「プラネットモードですか。」

「ああ、じゃあプラネットPGMをお前に返すぞ後で。」

「はい。ありがとうございます。」

「スバル。」

シドウは、いきなり真剣な顔になつた。

「何ですか。」

「WAXAアメロッパ支部から連絡があり、二ホン、シャーロ、アフリック、アメロッパ、アジーナに電波変換の出来る戦力になる者を集めろという事だ。どうする？スバル。」

「今、二ホンで決まっているのは、ゴン太、ジヤック、俺、ティア、そしてツカサだ。」

「ツカサ君ですか？？？」

「ああ、つい最近ツカサが和解から、帰ってきたんだ。」

「そうですか……。それに僕も参加します。ですが、ミソラは、連れていません。」

「そうか。分かつた。では、明後日の朝7時にWAXAに集合。」

「はい。分かりました。」

スバルは、電話を切つた。

「また、戦いか。」

『いいじやねえか。やり〜。』

「ロック、あまり喜ばないで。」

## //ソラの思い

スバルは、暁と電話をし終えて、ミソラの病室に戻っていた。

「母さん、父さん……話があるんだけど…………。ちょっと病室の外に。」

「どうしたんだスバル。」

大吾と茜は、スバルに従い茜と大吾は、外に出た。

「父さん、母さん。今日、サテラポリスから連絡があつたんだ。明日の7時にWAXAに集合……そして、WAXAアメロッパ支部に行くんだ。」

「本当なの?スバル。」

「うん。本当だよ。」

「そりが…………ごめんな。スバル、力になれなくて。」

「いいんだよ。僕、頑張るよ。」

「あまり行かせたくないけど……仕方ないは、それがスバルの使命だから。」

「ありがとう。じゃあ、先帰ってるね。」

スバルは、手を振り病院を出た。

『いいのか、スバル。ミソラに会わないで。』

「いいんだよ。会つと行きずりくなるからね。」

『やうか……。』

スバルは、ウエーブライナーに乗つた。

（サテラポリス病院）

茜と大吾は、ミソラの病室にいる。

「ミソラ、ねえ。」

茜は、ミソラの手を取りそっとミソラに話かけた。

「スバルがね、明後日アメロッパのWAXAに行くの。」

「えつ…………どうこう事??」

「スバルは、多分ミソラには、危険なめにあつてもういたくないつて思つているのよ。」

ミソラ、分かつてあげて。」

「うへ、うん……。」

ミソラは、自分の力の無さを悔やんだ。  
もしスバルが危険なめにあつても助けられない。助けに行きたいけど、この怪我じゃ足を引っ張るだけ…………。そう思つと自然に涙

が出てくる。

「ぐすつ…………うわあああん。」

茜は、ミンラを優しく優しく抱いた。

「コダマタウン」

約1時間。スバルは自分の家があるコダマタウンに戻っていた。

「戻ってきたね。」

『ああ、そうだな。』

すると、スバルのハンターNBにメールが来た。

「メールだ。暁さんからだ。』

スバルは、メールを開いた。

スバルへ

お前にプラネットPGMを返すぞ。

この、プラネットPGMにエースPGM・ジョーカーPGMの効果をヨイリー博士に加えてもらつたぞ。まずノイズエンジをしてから、

ファイナルライズをする。そして、新たなエンジの仕方、ファイナルフォースエンジ

をする。ブラック・エースに変身したら、

プラネットPGMを起動させ、ニユートリノ率を高める。そうすると、プラネット・エースになる。レッド・ジョーカーの時は、プラ

ネット・ジョーカーになる。もちろんプラネット・スター・ロックマンになる事もできる。

『だと。』

「知ってるよ。読んだんだから。」

『試してみよ。』

「今日は、寝る。」

スバルは、自分の家に向かつて歩き出した。

「お～～い。スバル～～～。」

やつてきたのは、牛島ゴン太だった。

「スバル。お前も行くのか、明後日。」

「うそ。まあね。」

▼ s オックス・ファイア

「コダマタウン」

スバルは、家に帰る途中に、ゴン太に捕まってしまった。

「スバル、お前も行くのか……ロックマンがいれば心強いな。」

「そんな事ないよ。」

スバルは、首と手を左右に振り否定した。

「じゃあ、スバル。俺と勝負だ！――！」

「いきなりだね。……今日は……『よっしゃー、殺るぞオックス。』

『

「勝手に決めないでよ。しかも、漢字がひどい。」

「よし、決まりだな。行くぞスバル。」

「ちょっと、人の……『ユニゾンコード N°.005 オックス・ファイア。』

ゴン太は、人の話を聞かずに勝手に電波変換をしてしまった。

「もう、ゴン……『スバル、俺たちも電波変換だ。』　ああ、  
もう分かったよ。

ユニゾンコード N°.003 シューティング・スター・ロック  
マン。」

スバルは、ハンターNBを空に掲げ叫んだ。  
青い光に包まれロックマンに変身した。

「ゴダマタウン ウェーブロード」

「スバル、本氣でいくからな。」

「行くよ。オックス・ファイア。ロックバスター。」

ロックマンは、左手をオックス・ファイアに向け左手から、何発かの球がオックス・ファイアに飛んで行ったが、オックス・ファイアに当たったがオックス・ファイアの体は、無傷だった。

「こんな攻撃効かないぜ。今度は、こっちからだ。オックス・タックル。」

オックス・ファイアは、ロックマンに向かって突進をした。まるで、闘牛のように。

「うわあ、今まで戦つた時以上に速い。」

ロックマンは、間一髪で上にジャンプして逃れた。

「強くなつたのは、お前だけじゃないぜ！――。俺は、オックスと一緒に辛い修業をしたんだ。」

「どんな修業？？？」

「例えば、牛丼を食べないとか。」

「なんだと、牛丼好きのゴン太が牛丼を食べないと、牛丼を食べないゴン太は、ゴン太じゃなくなるのか。」

「そりなんだよ。牛丼を食べない俺は俺じゃなくなる。」

「ゴン太、それは、とても辛い修業だったんだね。偉いよ。」

「だらう俺は…………」「隙あり、バトルカードソード。」

ロックマンは、右手を剣に変えてオックス・ファイアを切つたが剣が折れてしまった。

「ソードが折れた。」

「不意打ちとは、ずるいぞスバル。くそつ、オックス・フレイム。」

オックス・ファイアは、口から、火を出した。

「攻撃範囲が広くなつている。」

ロックマンは、上にジャンプをした。

「それを、待つていたぜ！！　アンガーパンチ。」

オックス・ファイアは、高く飛んだ。

「しまった。」

オックス・ファイアは、そのままロックマンを地面に叩きつけた。

「どうだ。俺は、強くなつた。」

オックス・ファイアは、勝つた氣でいるらしい。

『スバル、試してみようぜ。』

「そうだね。ノイズ率は100%。いける。  
ノイズチェンジ キャンサーノイズ。」

スバルは、ノイズチェンジをした。

「なに、ノイズチェンジが出来るのかよ。」

「これからが、本番だ。バトルカード バブルフック。」

ロックマンは、オックス・ファイアにアップバーをいた。その瞬間  
オックス・ファイアは、泡に包まれ抜けだけなくなつた。

『バトルカード エレキソード。』

次は、右手を黄色く電気が帶びてゐるソードに変え、オックス・フ  
アイアを斬りつけた。

オックス・ファイアは、マヒを起こし動けなくなつた。

「くそぅ…………。」

『ノイズ率200% ファイナルライズ ブラック・エース。』

』

ロックマンは、赤い球体に包まれた。そして、赤い球体から出てきた。体の色は、黒。バイダーは赤。羽が生えていて赤、黒。

「俺、やばくねえか。」

## 圧勝？惨敗？

「コダマタウン ウェーブロード」  
スバルは、ロックマンになりオックス・ファイアに電波変換したゴン太と戦っている。  
ロックマンは、ファイナルライズを使いブラック・エースに変身している。

「ファイナルライズができた。行けるよ。」

『そうだな。スバル。オックス・ファイアを叩き潰すぞ！』

「うん。いくぞ。ブラック・エンド・ギャラクシー。」

ブラック・エースとなつたロックマンは、腕を挙げ黒い球体を投げ  
オックス・ファイアを黒い球体の中に取り込んだ。そして、黒い球  
体の中に入つているオックス・ファイアをブラック・エースの赤い  
剣を使い斬りつけた。

斬りつけた瞬間眩しい光に包まれた。

「よし。ギャラクシーPGM起動。」

『.....ギャラクシーPGM.....起動.....。』

「一ゴートリノ率250%。行くぞ、ギャラクシー・エー『スバル。  
ちよつと待て。』

「なんだよロック。カッコ良く決めようと思つたのに。」

『オックス・ファイアをみる。』

ロックの言つたとおりにオックス・ファイアを見た。そこには、ボロボロになつて倒れていたオックス・ファイアがいた。

「やり過ぎたかな？」

『大丈夫だろう。』

結局ロックマンは、自分より体のかいオックス・ファイアを担いで河川敷まで連れて行つた。

「ううん。」

ゴン太は、まだ寝足りないのか畠をこすっていた。

「ゴン太、結構寝たね。」

「どうくらい寝た。」

「2時間くらいかな。」

「マジかよ。」

た。 }  
} } } } } } }

とスバルのハンターNBが鳴つ

「あっ、母さんからだ。」

スバルへ

今日は、ミソラのやばに居ます。なので今日は、帰れません。大吾さんは、仕事です。

「母さん、帰つてこないんだ。」

「スバルの母さん、帰つてこないのか。じゃあ、俺と梅屋の牛丼を食べよ。」

「いいね。梅屋で牛丼。」

「だる。行こ。」

「うん。」

スバルとゴン太は、梅屋で牛丼を早食い勝負をしたが言ひまでもないがスバルの惨敗であった。

圧勝？惨敗？（後書き）

サブタイトルの意味、分かりましたか？

## 謎の闇

「Z国 プリズム・ドーム 軍事室」  
ここは、机が一つにホワイトボードが一つ。

机の上には、山になつている沢山の資料、  
ホワイトボードには落書きのよつに乱雑に書かれている図があつた。  
その部屋には、一人男がいた。

「…………作戦はどうだ。順調か？」

「大丈夫だ。…………それよりアメロッパ大統領、ロバート・グリー  
ンがもうきずきやがつた。WAXAアメロッパ支部に二ホン、シャ  
ー口、アジーナ、アフリックの各国の電波変換の出来る者が集まる  
らしい。」

「そつか…………分かつた。まあ、頼んだぞ。」

その男は、電話を切り部屋を出て行つた。  
だが、その男はきずいていなかつた、後ろに男が固唾を呑んで見て  
居たことを。

（星河家）

スバルはソファーに座りテレビを見ていた。

「今日はいろんな事があり過ぎたな。新しい敵が現れるわ、ミソラ  
は入院するし、ゴン太とは無理やり戦わされるし、今日は疲れた。」

『スバル。ミソラが居なくて寂しいか。』

「そつそんな事ないよ。」

『ハツハツハー、顔赤いぜスバル。まあ、俺は、ハープのうるさい野郎がいなくて幸せだぜ。』

「じゃあ、僕寝るねロック。お休み。」

『おう、俺は刑事ドラマを見てから寝るぜ。』

スバルは、自分の部屋に行き静かに寝た。

（スバルの精神の中）

「ここは、何処だ。」

スバルは、辺りを見回すが白い世界だった。

『スバル。ここは何処だ。』

「ロック。僕も分からぬよ。」

そこに黒いシルエットが現れた。姿は、騎士そのものだった。

『星河スバルとウォーロックだな。』

「なんで、僕たちの名前を？お前は、誰だ。」

『我が名は、ナイト。ロックマンお前達は  
惑星 earth の守護者になった。』

「どういふ事？」

『それは.....。』

スバルは、意識が遠のいて行き日覚めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2236y/>

---

流星のロックマン4 ラストエンジェル

2011年12月17日19時56分発行